

女子大学生の自尊心と自己防衛・達成動機との関連

斉藤由里・前田健一

The relation of self-esteem to self-protection and achievement motive
in female university students

Yuri Saito and Kenichi Maeda

本研究では、自尊心の得点に基づいて対象者を高自尊心群、中自尊心群、低自尊心群の3群に分け、自尊心の高さによって自己防衛（自信のなさ下位尺度、他者意識下位尺度）や自己充實的達成動機（意欲下位尺度、好奇心下位尺度、オリジナリティ下位尺度）について検討した。その結果、自信のなさ下位尺度では低自尊心群が他の2群よりも有意に高かった。他者意識下位尺度においては低自尊心群が高自尊心群よりも有意に高かった。達成動機では、好奇心下位尺度得点において低自尊心群が他の2群に比べ有意に低かった。

キーワード：自尊心、自己防衛、自己充實的達成動機

問題

自尊心 (self-esteem) とは、自己概念に含まれる情報の評価であり、自己についての感情をさしている (遠藤, 1994)。例えば、学力に高い価値を置いているのに、実際の学業成績は平均レベルである子どもと、同レベルの学業成績を示しているが、学力よりも運動能力に価値を置いている他の子どもを比較してみよう。実際の学業成績は、この二人の間で同程度であるから、客観的には自分についての評価は同じくらいになるはずである。しかし、自尊心は客観的な成果や能力だけではなく、どの領域に価値を置いているかによって規定されるので、前者の子どもの自尊心は低くなり、後者の子どもの自尊心はそれほど低くならないと考えられる。このように、自尊心とは、たとえ平均的な人間であったとしても自分が設定した価値基準に照らして自分を受容することであり、自分に好意を抱き、自分を尊重することである (遠藤, 1994; Rosenberg, 1965)。

梶田 (1988) は高校生・大学生を対象にして自尊心の調査を実施し、因子分析によって自尊心を構成する要素を検討している。その結果、自尊心は自信、自己受容、自己への素直さ、優越感、自己防衛という質的に異なる5つの因子から構成されていた。これら5つの因子のうち、「自信」、「自己受容」、「自己への素直さ」の3要素は、自分が設定した価値基準に照らして自己評価する人が多いと考えられる。すなわち、自分が期待する一定の価値基準を満たしていれば自信を持ったり、自己を受容したり、自分に素直になれる場合が多いように思われる。しかし「優越感」や「自己防

衛」という要素は、自分が設定した自己基準を満たすだけでなく、他者が自分に期待する他者基準を満たしているかどうかを意識したときに生じやすいと考えられる。

現代青年は、友人と表面的な親密さを形成したり、友人関係に楽しさを求める傾向を示す反面、友人関係が深まりすぎて、互いを傷つけあうことを恐れる傾向があると指摘されている(岡田,1995)。すなわち、まわりから浮きたくない気持ちやまわりの目を気にし過ぎるために、表面的な友人関係を保っているが、特定の友人関係が深まると本当の自分が相手に知られて傷つくの恐れるという接近-回避の状態にあると考えられる。本研究では、自分が他者の期待や基準を満たしていないのではないかと恐れて、本当の自分を素直に自己開示しない傾向を自己防衛と捉えた。自己呈示方略の1つとして自己防衛を扱った先行研究によると、自尊心の低い人は、自分が優れた人間であることを死にもの狂いで人にみせようとしたり、自分が拒否されることを恐れるために自分を拒否しそうな人との接触を恐れたりすると指摘されている(佐藤,1993)。本研究では、自己呈示方略としての自己防衛が生じないようにするために、特定の他者や友人関係に限定しないで、特性としての全般的な自己防衛傾向を測定する。先行研究を参考にすると、自尊心の低い人は高い人よりも自己防衛傾向が高いのではないかと予想される。本研究の第1目的は、この予想を検証することである。

ところで、自尊心と達成動機との関連を検討した従来の研究では、自尊心は達成動機と関連するという研究(例えば、有木・福田・中島,1988)や、逆に関連しないという研究(桜井,1992)など数多く報告されている。これらの研究のほとんどは、例えば改訂版 ARMS(有木ら,1988)や EPPS(桜井,1992)など社会的な達成動機に焦点をあてている。このように従来の研究は主に社会的・文化的に価値があることを成し遂げたいという欲求としての達成動機を扱っているが、堀野(1987)は、達成動機には個人的な目標や価値のあることを成し遂げようとする欲求としての達成動機もあることを指摘している。そして堀野・森(1991)は、これを自己充實的達成動機と呼んだ。現在のところ、自尊心と自己充實的達成動機との関連を直接検討した研究はみられない。しかし次の2つの研究を結びつけて考えると、自尊心は自己充實的達成動機と関連すると予想される。まず堀野・森(1991)は、自己充實的達成動機が抑うつと負の相関関係にあることを報告している。工藤(1992)は、抑うつが自尊心と負の相関関係にあるという結果を得ている。間接的な結果ではあるが、堀野・森(1991)と工藤(1992)の結果を結びつけると、自己充實的達成動機は自尊心と正相関の関係にあると予想される。本研究の第2目的は、自尊心の高中低の3群間の比較および自尊心と自己充實的達成動機との相関分析を通して、この予想を検証することである。

方 法

対象者 広島大学の女子大学生 122 名を対象にした。

質問項目 自尊心、自己防衛、自己充實的達成動機の3種類の調査項目を使用した。いずれの尺度でも各項目の内容が自分にどのくらいあてはまるかを5段階(1:まったくあてはまらない, 2:あまりあてはまらない, 3:少しあてはまる, 4:わりとあてはまる, 5:とてもよくあてはまる)で評定させた。

(1) 自尊心尺度: Rosenberg (1965) の邦訳版(山本・松井・山成, 1982) の 10 項目を使用した

(表1). 自尊心の総点は10点から50点の範囲にわたり、得点が高いほど自尊心が高いことを意味する。

(2) 自己防衛尺度：成功恐怖などを参考に10項目からなる自己防衛尺度を作成した。自己防衛尺度の総点は10点から50点の範囲にわたり、得点が高いほど自己防衛が強いことを意味する。

(3) 自己充實的達成動機尺度：堀野(1987)の達成動機尺度の下位尺度を構成する自己充實的達成動機下位尺度13項目を使用した。自己充實的達成動機尺度の総点は13点から65点の範囲にわたり、得点が高いほど自己充實的達成動機が強いことを意味する。

手続き 大学の授業時間を利用して、3つの尺度別に調査用紙を作成し、3回に分けて集団で実施した。

表1 自尊心尺度

項目	質問内容
1.	人並みには、価値のある人間だと思う
2.	いろいろな良い素質をもっている
3.	敗北者だと思うことがある*
4.	物事を人並みには、うまくやれる
5.	自分には、自慢できるところがない*
6.	自分に対して肯定的である
7.	だいたいにおいて、自分に満足している
8.	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい*
9.	自分はだめな人間だと思うことがある*
10.	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う*

*逆転項目

結果

因子分析結果

1. 自己防衛

自己防衛尺度10項目について因子分析(主因子法,バリマックス回転)を行った。共通性の低い2項目,因子負荷量が.40に満たなかった1項目,複数の因子間で負荷量の高かった1項目のあわせて4項目を除き,再度因子分析を行った。その結果,表2に示す2因子が抽出された。第1因子は、「9.自分のありのままを出すことには抵抗がある」などの4項目からなり、自分に自信がないために自己防衛していると解釈できるので、自信のなさ下位尺度と命名した。第2因子は、「6.自分の気持ちよりも、相手の気持ちを優先して行動する」などの2項目からなり、他者を意識して自己防衛していると解釈できるので、他者意識下位尺度と命名した。

2. 自己充實的達成動機

自己充實的達成動機尺度13項目について因子分析(主因子法,バリマックス回転)を行った。その結果,表3に示す3因子が抽出された。第1因子は、「1.いつも何か目標をもっていたい」などの7項目からなり、成し遂げたい意欲をもっていると解釈できるので、意欲下位尺度と命名した。第2因子は、「11.今日一日、何をしようかと考えることはたのしい」などの3項目からなり、ポジティブな気分をもっていると解釈できるので、好奇心下位尺度と命名した。第3因子は、「3.人と競争す

ることよりも、人と比べることができないようなことをして、自分をいかしたい」などの3項目からなり、独自性を意識していると解釈できるので、オリジナリティ下位尺度と命名した。なお、項目4の負荷量は.327と.40以下だが、他の因子負荷量よりも第3因子に高い負荷量を示したので、第3因子に含めた。

表2 自己防衛尺度の因子分析結果

	F1	F2	共通性
自信のなさ ($\alpha=.744$)			
9.自分のありのままを出すことには抵抗がある	.722	.106	.547
10.自分に自信がないので、周りの人に従う	.722	.367	.656
7.本当の自分でない自分を演技しているように思う	.573	.186	.363
5.本当の自分を知ってしまうと、情けなく感じると思う	.454	.208	.249
他者意識 ($\alpha=.614$)			
6.自分の気持ちよりも、相手の気持ちを優先して行動する	.224	.681	.514
2.人の期待に応えないといけないうような気がする	.169	.606	.396
	固有値 2.729	1.049	
	因子寄与率 27.834	17.580	45.413

削除項目

1. 本当の自分を追及するのは怖い
3. 自分が何をしたいのかを考えてもしかたがない
4. 自分の本心を出さずに、相手に合わせることが多い
8. みんなの中で、浮きたくない

表3 達成動機の因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
意欲 ($\alpha=.782$)				
1.いつも何か目標をもっていたい	.685	.043	.167	.499
7.何でも手がけたことには最善をつくしたい	.645	.206	.023	.460
8.何か小さなことでも、自分にしかできないことをしてみたいと思う	.542	.309	.194	.427
6.みんなに喜んでもらえる素晴らしいことをしたい	.507	.210	.114	.314
10.いろいろなことを学んで、自分を深めたい	.452	.212	.108	.261
9.結果は気にしないで、何かを一生懸命やってみたい	.450	.129	.236	.275
5.人に勝つことよりも、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う	.430	.175	.315	.314
好奇心 ($\alpha=.729$)				
11.今日一日、何をしようかと考えることはたのしい	.120	.780	.062	.627
13.こういうことがしたいなあと考えると、わくわくする	.241	.711	.151	.587
12.難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	.245	.469	.057	.284
オリジナリティ ($\alpha=.918$)				
3.人と競争することよりも、人と比べることができないようなことをして、自分をいかしたい	.072	-.027	.779	.612
2.決められた仕事の中でも自分の個性を發揮したい	.370	.183	.561	.485
4.ちょっとした工夫をすることが好きだ	.177	.282	.327	.218
	固有値 4.324	1.393	1.213	
	因子寄与率 17.959	13.269	10.026	41.254

群間比較の結果

次に、自尊心尺度得点の平均値 ($M=31.730$) から $0.5SD$ (3.557 点) 以上の得点を示した者を高自尊心群, $0.5SD$ 以下の得点を示した者を低自尊心群, 両者の中間に位置する者を中自尊心群として, 3群を構成した。その結果, 高自尊心群 (33名), 中自尊心群 (56名), 低自尊心群 (33名) となった。

1. 自己防衛

自己防衛下位尺度ごとに群 (高中低) を要因とする 1 要因の分散分析を行った。その結果, 自己防衛の自信のなさ下位尺度において, 群の主効果が $F(2,119) = 26.780$, $p < .001$ で有意であった。多重比較 (Ryan 法; $p < .05$) の結果, 低自尊心群が高自尊心群 ($t = 7.100$) と中自尊心群 ($t = 5.452$) より, 中自尊心群が高自尊心群 ($t = 2.512$) よりも有意に高かった。自己防衛の他者意識下位尺度においても, 群の主効果が $F(2,119) = 4.952$, $p < .01$ で有意であった。多重比較 (Ryan 法; $p < .05$) の結果, 低自尊心群が高自尊心群 ($t = 3.146$) よりも有意に高かった。

2. 自己充實的達成動機

自己充實的達成動機の下位尺度ごとに群 (高中低) を要因とする 1 要因の分散分析を行った。その結果, 達成動機の好奇心下位尺度においては, 群の主効果が $F(2,119) = 9.541$, $p < .001$ で有意であった。多重比較 (Ryan 法; $p < .05$) の結果, 低自尊心群が高自尊心群 ($t = 4.114$) と中自尊心群 ($t = 3.524$) よりも有意に低かった。達成動機の意欲下位尺度とオリジナリティ下位尺度では有意な結果は得られなかった。各下位尺度の平均値と標準偏差を表 4 に示す。

表 4 各下位尺度得点の平均値 (SD)

	低自尊心群 ($n=33$)	中自尊心群 ($n=56$)	高自尊心群 ($n=33$)
自己防衛下位尺度			
自信のなさ	2.81 (0.63)	2.16 (0.46)	1.86 (0.57)
他者意識	3.59 (0.69)	3.31 (0.67)	3.02 (0.90)
自己充實的達成動機下位尺度			
意欲	3.98 (0.52)	4.07 (0.52)	3.90 (0.72)
好奇心	3.33 (0.89)	3.88 (0.60)	4.05 (0.68)
オリジナリティ	3.56 (0.73)	3.86 (0.60)	3.83 (0.73)

相関分析の結果

自尊心と自己防衛, 達成動機との関連を検討するため, ピアソンの相関係数を算出した(表 5)。自尊心と自信のなさ下位尺度, 他者意識下位尺度はそれぞれ負の相関がみられた。自尊心と好奇心下位尺度, オリジナリティ下位尺度はそれぞれ正の相関がみられた。自己防衛, 自己充實的達成動機のそれぞれの尺度内でも正の相関があった。自己防衛の他者意識下位尺度と達成動機の意欲下位尺度で正の相関がみられた。また, 自己防衛の自信のなさ下位尺度と達成動機的好奇心下位尺度, オリジナリティ下位尺度でそれぞれ負の相関がみられた。

表5 各下位尺度の相関係数($n=122$)

	自尊心	自信のなさ	他者意識	意欲	好奇心
自信のなさ	-.579**				
他者意識	-.234**	.399**			
意欲	.051	-.066	.299**		
好奇心	.301**	-.272**	-.024	.444**	
オリジナリティ	.219*	-.261**	-.081	.443**	.313**

* $p<.05$ ** $p<.01$

考 察

本研究では、女子大学生の自尊心と自己防衛・達成動機との関連を検討した。まず自尊心の得点に基づいて対象者を高自尊心群、中自尊心群、低自尊心群の3群に分け、自己防衛や達成動機の下位尺度得点に差があるか否かを検討した。

その結果、まず自己防衛では、自信のなさ下位尺度において、低自尊心群の得点が最も高く、次いで中自尊心群、高自尊心群の順に低下していた。また、他者意識下位尺度では、低自尊心群の得点が高自尊心群よりも有意に高かった。これらの結果から、低自尊心者は自分に自信がないために、必要以上に他者を意識して自己防衛していることがわかる。このことから、低自尊心者が高自尊心者に比べて自己防衛が強いという本研究の予想は、ほぼ支持されたといえる。おそらく、低自尊心者は、自分が設定した自己基準を十分に満たすことができないために、自己基準に照らして自己を受容したり、自分に好意をもつことができないのであろう。低自尊心者は自分を尊重できないとか自分に自信がもてない状態にあることを自分では知っていても、そのことを他者には知られたくないと考え、必要以上に他者を意識した自己防衛を示すのではないかと考えられる。

次に、自己充實的達成動機では、好奇心下位尺度において、低自尊心群の得点が中自尊心群や高自尊心群よりも有意に低かった。意欲下位尺度とオリジナリティ下位尺度では3群間に有意差はみられなかったが、相関分析の結果ではオリジナリティ下位尺度と自尊心の間に正相関が認められた。意欲下位尺度を除くと、これらの結果は本研究の予想を支持するものであった。すなわち、本研究の結果は、自尊心が高い者ほど自己充實的達成動機も高いことを実証するものであった。

ところで、表5から自己防衛の下位尺度と自己充實的達成動機の下位尺度間の相関係数に注目すると、自己防衛の他者意識下位尺度と自己充實的達成動機の意欲下位尺度との間には有意な正相関($r=.299, p<.01$)が認められた。この結果は、他者を意識した自己防衛をする者ほど、「8.何か小さなことでも自分にしかできないことをやってみよう」など自己充実につながる事柄に意欲を持ちやすいことを示唆している。逆の見方をすれば、自分にとって重要な事柄に意欲的に取り組む者は、そのことを知られないように自己防衛をしながら、友人や他者との関係に気をつけるといえる。本研究の対象者は女子大学生に限定されていたので、こうした傾向が女子に特有なのか、あるいは男女を問わず現代青年に共通するものかは、残念ながら本研究の範囲内では明確にできない。

また、自己防衛の自信のなさ下位尺度は、自己充實的達成動機的好奇心下位尺度との間($r=-.272, p<.01$) およびオリジナリティ下位尺度との間($r=-.261, p<.01$)に有意な負相関を示した。これら

の結果から、自分に自信がなくて自己防衛しやすい者は、好奇心に乏しく、自分の個性や独自性を発揮したいという欲求が低い関係にあることがわかる。自分に自信のない者は本当の自分を素直に自己開示しない傾向にあると考えられるので、自分の個性や独自性を素直に表現しようとするオリジナリティに乏しいことは理解できる。自分に自信がない人ほど好奇心も低いという関係は、どのように解釈すべきであろうか。表3をみると、好奇心下位尺度の項目は「11. 今日一日、何をしようかと考えることはたのしい」などの項目から構成されている。要するに、本研究の好奇心は、自分がこれからすることや先の事柄に興味・関心をもつことである。自分に自信がない人は、自分を防衛することに捉われ、その分だけ周りの事柄や他者に注意が向かないので、結果的に好奇心が低くなると解釈される。今後の研究では、自尊心と自己防衛や自己充實的達成動機との関連を確かめるだけでなく、自尊心の低い人の自己防衛や自己充實的達成動機を規定する要因を明らかにする必要がある。

引用文献

- 有木香織・福田敏隆・中島弘徳 1988 達成動機に関する研究(2) - 自尊感情と達成関連動機との関係について - 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 506-507.
- 遠藤由美 1994 セルフ・エスティームの心理学 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽(編者) 5章 ナカニシヤ出版
- 堀野 緑 1987 達成動機の構成因子の分析 - 達成動機概念の再検討 - 教育心理学研究, **35**, 148-154.
- 堀野 緑・森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, **39**, 308-315.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 第二版 東京大学出版
- 工藤恵理子 1992 課題の成功の予期における抑鬱的な人と非抑鬱的な人の違いについて 日本グループダイナミクス学会第40回大会発表論文集, 101-102.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 桜井茂男 1992 自己評価維持モデルに及ぼす個人差要因の影響 心理学研究, **63**, 16-22.
- 佐藤正二 1993 自尊心の発達と認知行動療法 - 子どもの自信・自立・自主性をたかめる - 高山巖(監訳) 岩崎学術出版
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.